

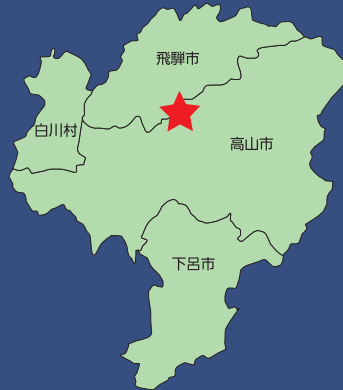
18

阿多由太神社

あたゆたじんじゃ

室町
時代

阿多由太神社



時 代

室町時代初期と推定

場 所

高山市国府町木曾垣内 1023

昭和 36 年、国の重文に指定されている。三間社流見世棚造柿板葺、桁行は 2.76m、梁間は 1.25m、向拝は 0.96m、基壇は玉石で積まれている。素朴・優雅で技法が極めて優れ、優雅な感じのする建物である。延喜式や三代実録に記載された古い社で、木曾垣内・三日町・半田の一部の産土神として、江戸時代にはこの地方の総社として広く崇敬されてきた。主祭神は^{さんげんしゃながれみせだなづくりこけらいたぶき}大歳御祖神、^{けたゆき}大物主神。

荒城川にかかる赤い欄干の橋の向うに社域の杜が見える。橋を渡って木造の鳥居をくぐり、階段の上が阿多由太神社の境内である。阿多由太神社の境内地は山裾の南面を切開いて南面した平坦地で、樹齢数百年の大樹が繁り、往昔より阿多由太の森と称されてきた。

本殿建物は様式、技法等から見て室町初期に建立されたものと考えられている。その後の修理年代についても記録がないため判然としないが、本殿は元禄以前より覆家がかけられていたが、江戸末頃に修理が行なわれ、昭和初年にも修理が加えられている。虫害及び腐朽は甚だしく、昭和 41 年 10 月からは 9 カ月の工期で全解体修理工事が進められた。

本殿の祭神は中央に大年御祖神、右脇間に熊野社家津御子神、^{ひだりわきま}左脇間に諏訪社建御名子神のほか、^{ななく}七軀の神像と二軀の随神像が祀られている。



阿多由太神社前



阿多由太神社 正面



阿多由太神社 外観



阿多由太神社 軒裏



軒裏



阿多由太神社から見た景色

19

小萱の薬師堂

こかやのやくしどう

室町時代

小萱の薬師堂



時代

室町時代

場所

瑞岸寺安楽院薬師堂：飛騨市神岡町小萱 151

中世北飛騨の領主江馬氏の菩提寺だった瑞岸寺の飛び地^{ずいがんじ}仏堂。古くから養蚕の守り本尊として広く信仰され、寝雑薬師と呼ばれる奇祭が毎年行なわれ、多くの信者が参拝に訪れていた。正式名称は「瑞岸寺安楽院薬師堂^{あんらくいんやくしどう}」といい、桁行3間（6.686 m）、梁間3間（6.666 m）、一重、入母屋造、こけら葺、国指定文化財。簡素ななかにも屋根の美しい曲線や、平面と立面の均整がとれていて、各柱は円柱からなり、柱頭には舟肘木をのせ軒は1軒、疎垂木^{そたるき}で、垂木は強く反り上がっている。内部の改造がたびたび行なわれているが、外観は中世の様式を残している。

この薬師堂はかつて隣の野首村にあり、現在地に移築された。堂内に安置してある薬師三尊十二神将御正体に永仁7年（1299）の刻銘があるところから、薬師堂の創建は鎌倉時代に遡るとする説もあった。しかし、昭和49～50年にかけて実施された解体修理復元工事によって、鎌倉時代建立の前身堂の部材を一部利用して南北朝末期、もしくは室町時代初期に再建されたことが判明した。

薬師堂は養蚕の守り本尊として、また5月8日が縁日の「寝雑ぜ薬師、小萱薬師」の名で近隣に知られ、現在、臨済宗妙心寺派「瑞岸寺」に属する仏堂として管理されている。瑞岸寺は天文元年（1532）、江馬氏によって飛騨市神岡町殿の地へ移ったが、以前は上村台地（下小萱、野首、丸山、上小萱）の小丸山にあったという。



薬師堂（国指定重要文化財）



薬師堂外観



薬師堂 基礎部分



軒裏



軒裏



舟肘木

20

荒城神社

あらきじんじゃ

室町時代

荒城神社



時代

室町時代

場所

高山市国府町宮地 1405-1

明德元年（1390）に創建され、元中7年（1390）に再建されている。三間社流造り、柿葺で、素木造り。本殿と棟札7枚が国の文化財に指定されている。

宮地鎮座の荒城神社は、延喜式神名帳にある飛騨国八社の一つである。祭神は天之水分神・国之水分神であるが、大荒木命を祀ったとの説もある。俗に荒城宮または河泊大明神と呼ばれている。つまり川の神、水の神として地域の信仰をあつめてきた。

本殿は、明德元年（1390）再建されたと伝えられている。その後、数度の修理をしたが、昭和7年の大修理を経て面目を一新した。三間社流造、柿葺、棟は箱棟とし妻飾豕叉首式、軒は二軒繁垂木で母屋は円柱の上に雄健な舟肘木をおく。向拝の柱は方柱で9分の1の大面取り、この上に唐様三斗をおく。両端の木鼻の上には天竺様の皿斗をつけた斗もみえる。

また向拝正面中央を飾る臺股は、肩の巻込みの眼が痕跡だけとなり、しかも両肩に大きな耳をつけたものは室町期のものであるが、内側の繰抜きは宝珠を中心に若葉を相称形にした古い形式のものである。棟札には、延宝6年午ノ3月吉日、再建立寛政4壬子載小春如意珠日など7枚がある。



荒城神社 鳥居



鳥居と石碑



境内の様子



拝殿 正面



拝殿



拝殿 軒裏

21

安国寺経蔵

あんこくじきょうぞう

室町時代

安国寺経蔵



時代

室町時代

場所

太平山安国寺：高山市国府町西門前 474

この経蔵は飛騨地方で唯一の国宝建築である。経蔵の建立は、天井裏にある輪蔵心柱の上端を受ける横木の墨書により応永 15 年（1408）と判明しており、内部の八角輪蔵は国内における現存最古の輪蔵である。輪蔵には寺僧が中国に渡航して請来した元版大蔵経（一切経）が納められている。心柱に大蔵経を納める書架を中心とした八角輪蔵の部材が取り付け、心柱を軸に回転する構造となっている。

飛騨安国寺は諸国安国寺の一つとして貞和 3 年（1347）に創立された。多くの安国寺は既存の寺院に寺号を付与する形で設置が実現されており、飛騨安国寺も前身寺院として少林寺の名を伝える（『扶桑五山記』）。本尊釈迦三尊像は延文 2 年（1357）の造立、現在経蔵に安置してある三牌は文和元年（1352）の作成、観応元年（1350）に示寂した開山瑞巖和尚の頂相彫刻は明德 3 年（1392）に造像され、開山塔（塔所）として成立した塔頭・瑞雲庵に安置されたと考えられる。

応永 2 年～ 11 年にかけて、益田郡中呂村・円通寺（のちの禅昌寺）の寺僧らが自坊に所蔵する大般若経をこの大蔵経と校合（文字の異同の確認作業）していることから、大蔵経が少なくとも応永 2 年以前に安国寺に請来されていたことがわかる。経蔵造営事業においては、建物より先に、大蔵経の入手が実現していたことになる。安国寺経蔵の元版一切経は現在では半数以上が散逸（さんいつ）してしまったが、なお 2000 帖を超える規模で当初納入された場所に安置されているのは、全国でも稀有な事例となっている。



安国寺経蔵（国宝）



唐式二重屋根



八角輪蔵



輪蔵仏像



組物



おさ欄間

22

熊野神社本殿

くまのじんじゃほんでん

室町時代

熊野神社本殿



時代

室町時代末期

場所

高山市国府町西門前 521

一間社流れ見世棚造^{こけらぶき}で柿葺、桁行 1.827m、梁間 1.073m、昭和 54 年、重要文化財に指定されている。荒城神社、阿多由太神社本殿に続くもので、飛騨地方の神社建築の流れを知る上にも重要である。

熊野神社本殿は、安国寺境内の北側にあつて西面して祀られ、近世には安国寺の鎮守であつた。現在は覆屋に入っている。明治初年、神仏分離によつて村社に列し、その後明治末期に拝殿、幣殿の建立と整えていった。その際、本殿を覆屋に格納するの^{おおいや}に狭いため背面軒廻り^{はいめんのきまわり}を切断してしまつた。昭和 61 年から 2 カ年にわたり解体修理が行なわれた。

創祀^{そうし}は詳らかでないが、安国寺の鎮守堂として建てられ、寛永元年（1624）に西門前村の請願によつて産土神となり氏子達に守られてきた。西門前村は、もとは荒城神社を産土神とする宮地村の中にあつたが、安国寺の興隆とともに門前町ができ、ついには東・西に分かれたものである。東門前村は分裂後も産土神を荒城神社にしていたが、西門前村には神社がなかつた。そのため、産土神として安国寺の鎮守堂を崇拝するようになっていった。

現在の祭神は、熊野大権現、伊勢皇大神宮、白山妙理大権現の木彫神像を祀っている。この三神像の背にそれぞれ祭神の名が書かれている。この像はその作風から僧円空によるものとされ、延宝 4、5 年（1676、77）頃の作と言われている。



熊野神社



熊野神社 鳥居



境内の様子



熊野神社覆屋 正面



熊野神社 右屋根



熊野神社 看板